

しなければならぬ。

3. ノコギリは雪に埋り易いので、その保管に特に注意する。

4. 我々は入口に荷を置いたので、奥に15cm角のブロック二つ分の穴をあけ、小キジ用トイレにした。本来なら入口附近にトイレを作るべきである。

以上思い当るまま書いて来たが、雪洞生活をしていると「山に入っている」といった感情は、テントで味わえないものがある。又、炊事用ブロックは壁を切り出せば済み、その穴は小物置やローソク台になる。そのローソクの灯は雪面に輝き、言葉に出来ない一種独特のムードをかもし出してくれる。

文 芸

1 探検部の「牢名主」について

古 谷 精 宏

小野竜弥一仲間は彼の事を技研の「牢名主」と呼ぶ、小生も又、そんな仲間の一人であった。大学四年間から社会人となって6年、足掛10年を通じて、小生も又この「牢名主」からいろんな事を教った様に思う。十年誌発刊に際し、今一度この30何才かのこの「牢名主」の影響を考えてみたいと思いペンを取ってみた。

そもそも小生とこの牢名主とは小生が新入部員として探検部に入部した時、すでにOBであり、彼は鹿児島にあった。そしてこの事に関してもその後、彼の性格のなせる業であったと聞く。

そして夏の立山～槍の合宿が終って冬山の準備のためのトレーニングとして六甲や蓬萊峽へ、岩登りやアイゼンの練習を毎週土曜日から日曜日にかけて行っていた頃であった。牢名主は、九州、鹿児島から帰阪した。そして我々に岩の登り方から、ザックのつめ方、登山用具の使い方を身をもって教えてもらった。

小生は元来、ヨウリヨウの良い人間で、夏山の合宿でもたえず疲れると、ザックの置きやすい所であって休けいした様な人間で、テント場につくと

元気が出る人間であるが、この「牢名主」にだけはどうしてもヨウリヨウの良さが通じる人間ではなかった。たえずどなられ、はげまされてばかりの様な気がしたものである。

冬の餓鬼岳という、なんとも変な名の山へ一諸に行ったのを初めとして、小生の知るかぎり、本業が何んであるかとうたがうほどにその頃の我々現役の活動に対して協力、指導をおしかなかった。それは九州、鹿児島半島に生まれた彼の気一本の性格がそうさせたのか、あるいは、それ以上に山に対する情熱がそうさせたのか、小生にはその両方が小野氏をもって、そういう行動を取らせた様に思う。

その頃の我々にはありがたいやら、窮屈やらでたえず遅れまいとすることで精一杯であった。

そして小生は大学4年間を探検部の一員として大いに満足出来る青春時代を過し社会人になった。

社会人になってより一層、小野竜弥「牢名主」という人間のもつ情熱が、どんな困難で、苦しく、きびしい環境の中でさえ、尚真赤と燃えている事におどろいたことが、何度となく小生の気持を動様させたことであった。

ある時は、現役の合宿中の事故の時にすぐ現地へ飛んで行ってくれた人もこの「牢名主」であった。

会社の倒産、転職につぐ転職の中でさえ、その情熱は尚、燃えつづけていたのである。

小生が家業のインテリア事業部として家具業を始めてまもない頃、商売は思う様に伸ずどうすれば良いかわからず迷いに迷っていた頃だった。クラブの会合の時だったが、「古谷、」小野氏の独特の語尾が上る呼び方で私を呼んだ。「山へ行く人間は、山へ行く。それはそれで良い。古谷は商売の道で頂上をねえ。商売でどうしても迷ったら、ヨメさんでも、もらえば良いではないか。」半分ひにくもまじっていたのかもしれないが、私はその時、「そうだ、人には人の生き方もある。私には私の人生がある商売の道でバイオニースピリットをはっきして生きて行こう。」私は山を忘れたわけでもなか

ったが、又、いつの日か、気持の上でも、はっきり「山」を求める時まで、「山」は一時忘れよう。私は何故かこの牢名主と呼ばれる人の言葉に素直にうなずいていた。根が単純なせいもあるのかもしれないが……………。

時に彼は又、淋しがり屋のロマンチストでもある。雨が降ったり、雪山の吹雪の停滞の時など彼の木層節や刈干切歌が、我々の気持をなごませてくれたものだった。

そして又、かわいい子供の写真をサイフに入れて見せてくれる、親バカぶりも時には発揮する。

小生にとって、いや我々仲間にとって、この「牢名主」ほど頼りがいのある、恐しい人間はいない様だ。

小生自身にとっても学生時代から、社会人になってからも、「山」を通して、人間としての生き方、考え方を、これほど強烈に教えていただいた人は、かつてなかった様に思う。

私の青春時代を通じて、いつまでも、忘れ得ぬ人として、仲間と共に、いつまでも心に残しておきたい人でもある。

小野竜弥、技研の「牢名主」の今後のますますの御活躍を祈るとともに、今後共、御協力、御指導を願ってやまない考えです。

己がかってな文になり、まことに恐縮するところではありますが、先輩として、後輩の乱文乱筆をお許し願います。

2 回想の黒部

「その一」

永 森 洋 一・小 野 龍 弥

通いなれた峠も、いつもながらに苦しかったが、ひとり峠を登ってきた少女が、山の名を尋ね、手帳にスケッチを頼まれた。写真をとってもらったお礼に、水晶岳の水晶をさし出すと、ヤッホー、と峠を下っていった。

二度のアタックを天候のため果たしえなかった上ノ廊下は遠く赤牛の下を流れている。三度目の正直という言葉がある。今度はぜひとも征服してやる